

私がなぜ現在の科目を選んだか

「消化器外科」

信州大学医学部外科学教室
消化器・移植・小児外科学分野

黒岩正嗣

私が外科医として働き始め、はや3年が経ちました。今回、信州医学雑誌に投稿する機会をいただき、自分が外科、専門分野として消化器外科になった経緯と理由を執筆に合わせて振り返ってみます。

私が勤めた初期研修先の施設は総合病院で、性格的に体育会系な私は、進路は外科系かなとぼんやり考えながら研修を始めました。そんな矢先、消化器内科で研修中に内科部長に突然「消化器外科に向いてるよ」と言われ、外科の上級医に「外科に決めたらしいよ」と他科の先生に言いふらされ、誤解を恐れずに言えば各科への進路が閉じ、激しい囲い込みに遭いながら自然と進路が決まっていきました。ただ決して無理な誘いではなく、外科の先生方には院内外を問わず常にお声かけいただき、患者さんとの接し方や学会発表のご指導はもちろん、研修医の私に胃切除術を執刀させてくださったことは今でも強く覚えています。広く外科

私がなぜ現在の科目を選んだか

「遺伝医学」

信州大学医学部遺伝医学教室

武田良淳

現在私は、長野県立こども病院遺伝科に勤務しながら社会人大学院生として遺伝医学教室に所属し研究を行っています。医学部卒業後に小児科医として大学病院、地域病院に勤務しておりましたが、内分泌異常を伴う先天異常症候群の患者さんを担当したことをきっかけに小児内分泌疾患に興味を持ち、卒後10年目から東京都立清瀬小児病院（現：東京都立小児総合医療センター）で研修を行いました。低身長や糖尿病など小児内分泌疾患の診療を行う中で、染色体・遺伝子異常をもつ患者さんと接する機会があり、より専門的に小児遺伝医療と遺伝カウンセリングを学ぶため東京都立小児総合医療センター臨床遺伝科で研修を行いました。研修終了後に小児遺伝医療に従事できる施設を探して

医としての生き方をご教授いただき、指導のための労力はその方のご負担であったかもしれませんが、外科医人生の基礎をつくってくれたものと思います。

また消化器外科の診療科としての印象を医学生に聞くと、患者さんが手術を受けて元気に退院していく科との返答をよく得ます。実際に入局してみると事は単純ではなく、外科技術の発展に伴った高度な手術手技をはじめ、解剖の知識や病態生理、また近年の高齢化に伴い様々な合併症を有する患者さんが増加し周術期における全身管理のため内科も含めて幅広い知識が要求される科だと知りました。また初診の時から手術、周術期管理、術後何年にもわたる経過観察、化学療法、その人の最期を迎える瞬間まで患者さんと長くお付き合いをします。その間は患者さんにとって病気との闘病の日々で、時には人と人の関わりが必要になり、今や外科医の仕事は手術をするだけではないのです。

最期に、医師は皆そうでしょうが例に漏れず外科医も時間的に恵まれているとは決して言えません。しかし、外科診療において本気で患者さんひいては医療に向き合うことで、必ずそれ以上に得るものがあると思います。多くの後輩たちが外科の魅力を感じ、ともに研鑽していけることを願っています。（信大平28年卒）

いたところ、現遺伝医学教室・遺伝子医療研究センター古庄教授より長野県立こども病院遺伝科での勤務と信州大学遺伝医学教室での研究のお話を頂き、2018年より長野県へ赴任しました。現在、こども病院で先天性・遺伝性疾患に対する遺伝学的診断や健康管理、遺伝カウンセリングを中心に診療を行い、大学院では遺伝性結合組織疾患の一つである骨形成不全症の遺伝学的診断と臨床像との関連を主題として研究を行っています。

遺伝医学は薬剤投与など直接治療に関わる機会は少ないですが、遺伝学的検査による正確な診断により健康管理の提供や有効な治療法の選択、遺伝カウンセリングを通じたクライアントへの心理・社会的支援など、幅広い領域に関わることのできる分野です。遺伝学の知識だけでなく、今まで経験してきた小児科学や小児内分泌学の経験を活かしながら診療や研究を進められるよう努力していきたいと思っています。

（昭和大平12年卒）